

保護者の皆様

枚方市立招提北中学校

校長 山本 俊夫

平成 30 年度学校教育自己診断の集計結果と改善に向けて（概要）

余寒の候、保護者の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は、本校教育にご理解ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、昨年 12 月に実施致しました「平成 30 年度学校教育自己診断」にご協力を頂きまして、誠にありがとうございました（回収率 保護者 90%、生徒 93%）。保護者・生徒分の集計結果や今後の課題、改善点についてご報告申し上げます。※なお、結果の詳細につきましては、3 ページ以降をご覧ください。

1. 肯定的評価が、比較的高かった設問項目

生徒では、今年度も、全般的に肯定的な評価が多く見られました。設問 2 「先生は生徒の意見や考えを大切にしてくれる」93%（昨年度 89%）、設問 5 「授業でわからない事について先生に質問できる」81%（同 76%）、設問 7 から設問 15 までの「（国、社、数、理、英）の授業では内容を理解しようと取り組んでいる」及び「（音、美、保体、技・家）の授業では、内容を理解し技能を高めようと取り組んでいる」では 9 教科平均して91%でした。今年度は、授業への向き合い方について問いましたが、概ね積極的に取り組んでいるようです。また、設問 16 「学級活動の時間では～」88%、設問 17 「総合的な学習の時間では～」87%と、教科学習以外の教育活動についても積極的に取り組んでいるようです。さらに、設問 22 「先生は悩みや相談にも～守ってくれる」83%（同 82%）、設問 22 「先生はいじめや～困っている事に～」86%（同 81%）で、今後も職員一同これまで以上に子どもたちとの信頼関係の構築に努め、生徒に寄り添った支援を実践いたします。

保護者では、設問 1 「子どもは、学校行くのを楽しみにしている」80%（同 78%）、設問 2 「先生は、子どもの意見や考えを大切にしている」76%（同 78%）、設問 10 「先生はいじめや暴力のない学校づくりに～」76%（同 72%）、設問 11 「先生は～毅然とした指導をしてくれる」80%（同 78%）、設問 16 「学校は～規範意識を～」84%（同 80%）と高評価をいただきました。今後もご家庭や地域と連携させていただき、子どもたちが安心して学べる学校園を目指してまいります。

2. 厳しい評価が、比較的高かった設問項目

生徒では、特に設問 6 「授業の最後に授業内容を振り返る活動をよく行っている（新項目）」65%、設問 20 「家で宿題や今日学んだことの振り返りをしている（新項目）」54%となっており、課題が見られました。この 2 項目については、現在行っている取組も含めまして再検討していきたいと考えています。設問 30 「学校の授業時間以外に、普段～どれくらいの時間、勉強～」については、「2 時間以上」と回答した割合は、1 年生 39%、2 年生 23%、3 年生 62%で、2 年生の低さが目立ちました。全般的に中学生の放課後は部活動や習い事等、大変忙しいことは認識していますが、家庭での学習時間の調整、家庭学習の充実に向けた取組を推進していきたいと考えておりますので、ご協力お願いいたします。

保護者では、設問 6 「子どもが～友達や先生に質問できる」66%（同 57%）、設問 12 「先生は～カウンセリングマインド～育てようとしている」66%（同 55%）と昨年度より向上が見られるものの、まだまだ低い状況にあり、引き続き生徒との信頼関係の構築、授業改善等、様々な取組を推進していきたいと考えております。設問 20 「学校は子どもの資質・能力の育成に～（新項目）」で61%となっており、「資質・能力」について説明不足であると感じております。

現在、次期学習指導要領の移行期となっており、様々な教育活動の見直しや新たな取組を行いつつ、「主体性」「問題解決能力」「論理的思考力」「コミュニケーション能力」「協働する力」等の育成を目指しています。今後も教育活動全体を通じて、将来を見据え、社会に出たときに通用するような「資質・能力」の育成に努めてまいります。

3. 文章表記について

保護者の方々から、自由記述欄に貴重なご意見やご要望、また、激励やお褒めの言葉等を頂きました。文章表記については、全学年分を全教職員が情報共有するとともに、ご意見やご要望等について、しっかりと把握に努め、今後の教育活動の参考とさせていただきます。

4. 今後の改善に向けて

本年度も、生徒の学びに向き合える学習環境を実現できたと考えていますが、この学校教育自己診断の集計結果を謙虚に受け止め、職員一同、授業改善、指導力向上等に努め、今後も子どもたちの健やかな成長を支援してまいります。

5. 定期考査における「平均点」の算出及びこれからの教育について

評価方法については、全国的には今から十数年前（平成12年ごろ）から評価方法を「集団に準拠する評価（相対評価）」から「目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）」に切り替え、点数による序列ではなく、一人一人の到達度に応じて評価する方向になっていました。

そのような状況であったにもかかわらず、大阪府では、長らく公立高校の入試における「内申点」において「相対評価」を採用してきました（例えば【「10」はその学校の学年の人数の3%の数にする】など）。しかしながら大阪府も数年前より、「内申点」においても「目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）」の評価方法に舵が切られました。国に倣って、児童生徒一人一人の「個の学力」評価を見ることになったわけです。

このように「個の学力育成」を図ることが重視される流れの中で、本校においても「定期考査」と「実力テスト」の性格の違いについての確認を行いました。「定期考査」は、単元やある一定期間に学んだ内容の理解度を確認するために行われます。そのため出題される範囲は限定され、目指すところは「内容全ての理解」です。この「定期考査」の結果で大切にしたいところは「普通の学校・家庭での学習」「理解できていなかったところ」です。

例えば、以下のような例の場合、みなさんはどのように思われるでしょうか。

①生徒の得点：60点 学年平均：40点 ②生徒の得点：60点 学年平均：70点

①と②の場合で、生徒への「評価」が変わることはないでしょうか。どちらの場合も「40点分は間違った（理解できていなかった）」にも関わらず、この「平均点」によってその生徒への言葉かけや本人の意識、問題の質、学年集団の評価が変わることはないでしょうか。「平均点」があることで「点数による序列」を意識することになり、その生徒個人の「到達度」に意識がいかなくなります。これは国が定めている「評価」の方向性に反することになります。

以上のように「定期考査」は「どれだけ点が取れたか」ではなく、個人の「到達度」を確認し、実施後も「理解できていない」部分の理解に努めること、「普通の学校・家庭での学習」を大切にすることに重きを置いています。各教科等で学んだことを、短期的な「記憶する知識」で終わらせるのではなく、長期的な「駆動する知識」*1となることを目的としていますので、その後も「活用」「振り返り」「単元テスト」「再テスト」等を実施する場合があります。

このような理由から、「平均点」の必要性はなく、算出し、お示しすることを取りやめることとしました。

なお、「実力テスト」については、生徒の「実力（学力）」を測る指標ですし、進路の判定資料として必要ですので、各教科の「平均点」をお示ししています。「定期考査」とは性格が違うので、この結果は通知票の「評価」の資料としては扱いません（全国学力・学習状況調査、大阪府チャレンジテストの結果も同様です）。

次期学習指導要領においては、「学力」という言葉は使用されず、「資質・能力」という言葉に変わっています。私たちや保護者のみなさんが中学時代に受けてきた教育とは大きく転換し、「個人」の「生きる力」「活用できる知識・技能」「主体的に物事を考えること」「学びに向かう力」等の育成が国レベルで強調され、明記されました。それは、国としても、それらの「力」が、今の子どもたちが10年後、15年後に社会に出たときに、社会人として必要とされる「資質・能力」であると考え、義務教育の時点からその育成していかなければならないという強い決意のようなものを感じ取れます。

本校も、「教科指導」のみならず、「総合的な学習の時間」や「特別活動」など様々な教育活動を通じて、学習指導要領に示された「資質・能力」の育成に向けて取り組もうとしております。まだまだの部分もありますが、子どもたちの将来を見据えた教育活動を推進していきたいと考えておりますので、ご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

*1 「駆動する知識」：各教科等の学習過程において身に付けた「知識・技能」を相互に関連付けたり組み合わせたりして、「汎用的な能力」となってどこでも使いこなせるようになる「知識・技能」のこと。現國學院大學教授（元文部科学省視学官）の田村学先生が、著書「深い学び」（東洋館出版名者）の中で表現されている言葉。